前期に出された意見（言葉遣い・コミュニケーション関係）の概要

1　言葉の「分かりやすさ」に関する意見

○　分かりやすさという点では，聞いて分かる，読んで分かる，それと，学問的な正確さを期す場合と，行動決定のための判断のよりどころにする場合の分かりやすさは分けて考える必要がある。また，コミュニケーションスタイルの問題も関連する。

○　情報機器との関係から言えば，現在は，ロボットや機器に分かりやすい言葉，また，翻訳しやすい日本語が問題になっている。

○　分かりやすさと，正確さは反比例するものであると感じている。この二つのバランスをどう取るかが難しいと思っている。

○　分かりやすい文章というときの，分かりやすいには，その内容に関するものと，表現に関するものとがある。内容が難しいものを分かりやすい表現にするかどうか，内容が分かりやすいにもかかわらず，あえて分かりにくい表現を採るかどうかが問題である。

○　世の中に分からない表現が蔓延（まん）していて，本当は受け手も分からないのに，何となく了解しているような表現が非常に多いという気がしている。手話ニュースは非常に分かりやすいということで，人に優しい日本語という観点から，外国人だけでなく，障害を持った方，高齢者，子供たちにまで対象を広げて考えていきたい。

○　言葉というのは文化であって，そこには美しさと，奥深さが必要である。その美しさとかが，別の面から見たら，分かりにくいということになっているのかもしれないが，それをそぎ落としていくというのは危ない行為ではないか。現在，日本は国際化社会になっていて，大学を含め様々な国籍の方が生活しているのは事実であるが，そのことを過度に手当てし過ぎるのは，日本語にとって危ないことではないか。

○　文学の世界では，今は言葉をそぎ落として無駄なことは書かない傾向がある。それで，非常に分かりやすくなったけれども，潤いがなくなり，つまらない世界になったと思う。この辺りは考え直してもいいのではないか。

○　すみ分けが必要。官公庁等が被災者に対して発するメッセージに文学的修辞は不要である。そこは，無駄をそぎ落として端的に誤解のないように伝えることが優先される。その世界と，文学の世界で感性を楽しむということとは別のことである。

○　そぎ落として直截（せつ）な表現にするとそっけないようだが，それだけ読者にいろいろ負荷を掛けて，読者の想像に訴えるという意味では，逆に豊かになる可能性もある。ただ，受け手の側が豊かさを持っていないと，深い意味は読み取れないという面もある。どちらがいいかは，場面，状況，ジャンルによって決まってくるものである。

○　無駄をそぎ落とすというのは，情報伝達という立場からの捉え方であって，文学的に考えると，それは無駄なものではなく，本来持っているものであるということになる。

○　内容そのものが高度で複雑だと，分かりやすく表現しようとしても限界がある。そこを突破するには，受け手の側に分かりたいという意欲がないと難しい。その意欲を生じせしめるような豊かさや美しさがあるというようなところもあるのではないか。また，冗長な部分をそぎ落とすことによって生じる美しさというのがあると思う。

○　そぎ落とした表現の持つ美しさと，その逆の素っ気なさ，それから冗長な表現の持つ美しさと，その逆の煩わしさ，この両方があるのではないか。

○　分かりやすさというのは，全ての日本語に一様に当てはまるものはないのであって，何をどう伝えようかという目的によって決まってくる。その辺りを整理していく必要がある。将来の日本語の在り方にとっても，この分かりやすさがキーワードになろう。

○　話し手と聞き手との間に共通の理解があれば，どんなに複雑なことでも，冗長な文章でも分かりやすいはずである。共通理解の幅が変わることが，言葉の変化とつながっているのではないか。

○　分かりやすさを追求していくと，専門用語との戦いになってくる。専門用語とは単に学術用語の問題ということでなく，専門的な分野でならスムーズにコミュニケーションできる，そういう用語を他の分野の人にどう伝えるかということの問題もある。

○　社会全体で使う言葉についても，突き詰めていくと，分かりやすさが一番大事なキーワードになるのではないか。これからの国語政策にどういう項目が必要かを考えていくためにも，分かりやすさという角度が，その基礎になっていくと思う。

○　情報機器を使うと文章がパターン化してくるが，情報機器を利用して書くということを前提とした中での，分かりやすさの追及ということも課題として考えてほしい。

○　分かりやすいさの問題は，外国人にも日本人にも，公共の問題として，公のやり取りをどう簡潔に分かりやすくするかの問題に特化して取り組む必要がある。

○　規範を作るということを，分かりやすさという観点からやるのは難しいと思う。場面・状況分けでもしないと，分かりやすさというのは施策になじみにくい。情報化という社会変化については，先々に行ったときに混乱が生じるのではないかと危惧している。

2　「平明・的確・美しく・豊か」な言葉に関する意見

○　「平明，的確，美しく，豊か」を，＜平明，的確＞と＜美しく，豊か＞という二つのグループに分けて相反するところがあるという見方をするよりも，この四つのバランスが取れていることが，日本語のあるべき姿であるという見方をする方がいい。

○　不特定多数の人に伝えることを考えると，美しく豊かということまで含めると，ある人にとっては平明ではないということになって，情報伝達ができない場合もある。公の場で正確に伝わることを考えた場合，そぎ落としていかざるを得ない言葉もある。

○　国語施策の流れも，昭和47年の「当用漢字改定音訓表」以降，「平明」から「美しく，豊か」というところに重点が移ってきたのではないか。

○　平明，的確，豊かまではいいが，美しさとなると，それぞれの価値観に基づくところがあって，国語施策になじみにくい気がする。それから，言葉における情の部分を国語施策にどういうふうに反映させていけるかも課題である。

○　「外来語の表記」の第１表は「平明，的確」，第２表は「美しく，豊か」を担保したと捉えることもできるのではないか。

○　四つの概念をどうやって総合的に生かしていけるのか，最大価値にしていけるのか，それが大事である。美しさ，豊かさは人によってイメージが違うが，ある程度は共通のイメージがあった方がいいと思う。

○　「平明で的確」は理性的な認識に関わるもので，大多数に伝わるか否かが，物差しとなる。発信の側が考慮できる問題である。「美しく豊か」は感性的な認識，情に関わる部分で，受け手側の多様性に応じて拡散していくものである。

○　四つの言葉の反対概念を考えると，「平明や的確」は分かりにくい，「豊か」は言葉の量や数が少ない，と言えそうであるが，「美しい」は，感性の領域に入ってしまい，反対概念をうまく言い表すような言葉がないように感じる。

○　この四つを国語という言葉でくくっているが，国語ではなく，日本語の運用についての言い方だと捉えた方がいい。

○　基本的な認識としての「平明，的確，美しく，豊か」は，平明，的確と言いながら，非常に曖昧な表現を含んでいるという問題がある。

○　常用漢字表は，「平明，的確，美しく，豊か」とは別で，漢字を使うか，使わないかということにだけ関わるものである。「平明，的確，美しく，豊か」が適用されるのは広場の言語であろう。施策として取り上げるなら，まず適用範囲を決める必要がある。

○　どういう状況における「平明，的確，美しく，豊か」を考えるかが大事である。

○　「平明，的確，美しく，豊か」は，日本語運用において目指すべき四つの目標としての要素であるが，これがいつでも全てが同じ程度に必要だというのではなく，何を誰にどういうふうに伝えるかによって，その要素の軽重がおのずと変わるものである。

○　この四つの要素が，パブリックな場におけるコミュニケーションの目標であるという前提を明確にさせたいと思う。

○　「美しく」を別の表現，人を不快にさせないとか，配慮した言葉遣いとか，そうすればパブリックの場の基準として，かなり有効に機能するのではないか。ほかに「親しみやすい」「心地良い」「好感が持てる」「快適である」「魅力ある」などはどうか。

○　「美しい」に対置されるのは「不快」ではないか。不快な念を抱かしめる表現ということになるのではないか。

○　無駄のない機能的な姿も美しいし，非常に複雑な形をした花びらも美しいというように「美しい」は多義的であるがゆえに，曖昧で抽象的になっていくおそれがある。

○　コミュニケーションの場で，日本語を運用するときに必須である四つの要素，それらの全てが同じように必要ということではなく，状況によって濃淡が変わってくるという捉え方でいいのではないか。

○　その捉え方には全く賛成であるが，「平明，的確，美しく，豊か」をもう少し丁寧な分かりやすい表現にできればいいと思う。また，音声が入ってくると全く別要素になるので，音声と文字をどう整理するかも課題である。

○　分かりやすく正確というのが，現代の表現のキーポイントとしてあるが，もう一つ，人に配慮した言葉遣い，配慮が三つ目として必要ではないか。この三つ目が「美しく」と関係してくるように思う。

○　「美しい」は「平明，的確，豊か」の全てを包括するものかもしれないと感じるが，逆に，全てを包括しているので，簡単には手を付けられないと感じる。

○　言葉を記号的なものとしてではなく，言葉の情的な面や，言葉の持つ力についても，議論していければいいと思う。

4　「言葉遣い・コミュニケーション」と「国語施策」に関する意見

○　国が提案するのは，食物で言えば基本栄養素に当たるところまでであろう。そこから先は各自が考えていくべきことではないか。

○　情報学の世界では，最近，コミュニケーションが非常に多様式になり，変化してきたと言われている。日本語は，話し言葉と書き言葉の境がなくなったことによって，急速に変化しつつあり，それが世代間のギャップを広げている。

○　公が発するものをもう少し分かりやすく，伝わるものにしようということでは，まずは，行政が自分たちを律するような意味での指針や，公から発信していく言語を整えるための指針を作ることを考えたらよいのではないか。

○　公的な場面で使うという方をまず優先するのが，規範という形では設定しやすいのではないか。漢字表や敬語等は規範が求められていたので，うまく行ったと思うが，それがないところで踏み込んでしまうと，収拾が付かなくなるおそれがある。

○　コミュニケーションという考え方には幾つかのレベルがある。敬語や常用漢字表のような，コミュニケーションが絡むレベルと，コミュニケーションという極めてメタな概念そのものを同じ土俵で議論することは，なかなか容易じゃないと思う。

○　コミュニケーションを国語施策の扱える範囲として取り上げたのが「敬語の指針」だったと思う。だから，もう少し何かできるとしたら，「敬語の指針」のＱ＆Ａを待遇表現全般にまで広げて，更に多くの問題を取り上げるという辺りではないか。

○　官公庁がホームページ上で発信したり，メールでやり取りしたりするということは実際に行っているわけだから，公用文の要領を，そういうところまで目を配った形で改定していけば，現代のコミュニケーション課題を解決することにもなろう。

○　コミュニケーションという言葉を使って意味している範囲は，それを使う人間や立場によりまちまちであるので，コミュニケーションの意味するところを絞るか，あるいは焦点を絞っていかないと，なかなか議論が具体化しないと思う。

○　一言で言うとコミュニケーション能力なんだけれども，社会では，実際にどんな能力を重視しているのかを分析することに，大きな意味があるのではないか。

○　必要だと思うのは，既に会社で働いている人間が言っていることを理解する力，それと同時に，彼らが思っていることをこちらにちゃんと伝わるように話すとか，書くとか，大きく言えばきちんと表現できるという力である。

○　言葉には，読み書きにしろ，話す聞くにしろ，コミュニケーションの手段という側面が必ずあるので，これだけは絶対に担保しておかなければならない機能である。一方，変化していくものでもあるので，そのバランスをどう取っていくかが大事である。

○　たまに見掛けるのは，相手と自分とがどういう場面でコミュニケーションをしているのかということが理解できないというか，ＴＰＯの使い分けができないということがある。その結果，敬語を使うべきところで，それが使えないことになる。

○　先ほど話に出ていた，基本栄養素と言うか，これが，基本栄養素の文章だというのがどこかにあると，そこからのバリエーションというようなことがよりはっきりしてきていいのかなと思う。その前提で指針のようなものを考えてもいいと思う。

○　国語施策としてというふうに枠組みをされたところで，意見が出にくくなったと思う。やっぱり学校教育の分野と，この世界は切り離せないので，何とか，そことつながる施策にしないと，非常に狭い国語の議論になってしまうのではないか。

○　コミュニケーションという言葉が様々に受け取られているということが，先ほど出ていたが，参考資料の冊子を見ても，出てくるごとに全部ばらばらである。その意味で，それそのものを分かりやすく整理することも意義のあることだと思う。

○　施策の方向性からすると，先ほどから出ていたように，公用文の方に行くことになると思うが，文化と言うのか日本人の人間性と言うのか，そういうところの問題からすると，やっぱりコミュニケーションの問題は非常に大きいと感じる。

○　参考資料の冊子の58ページを見ると，こういうコミュニケーション能力の育成という取組をした結果，すぐに自分から進んで周りの人に話し掛けるようになるかというと，そうではない。現実問題として，そこに若干の落差が出ていると感じた。

○　最近の日本語学校の需要として，専門学校を卒業する前の日本人学生に，敬語や社会の中でのコミュニケーションの取り方を教えてほしいという依頼がある。そう考えるとコミュニケーション能力は外国人だけでなく，日本人こそ必要だと思う。

○　コミュニケーションと言った場合には，ただ単に知識を得ているだけでなくて，言葉を発して，それを相手に投げ掛けて，受けた側はそれを理解して，自分の言葉として投げ返すということになる。私たちも，コミュニケーション力というのは，一体何なのか，何をすればそれが付くのかを非常に重要な問題と考えている。

○　コミュニケーションに必要なのは，人と人とがつながり合う，伝え合う，また，理解し合える，あちこちとぶつからないで，人間関係をスムーズにしていくための手段を身に付けるというようなことだと思う。

○　国語力の構造図に，もう一つ共感する力を入れれば，コミュニケーション力の図として書き換えても通用すると思う。こういう大きな図式を整理しておいて，そこから施策として取り出せるのはどれかと整理していくと，議論しやすいと思う。

○　そもそも日本社会において，今，話題にしているコミュニケーション自体が本当は行われてこなかったように思う。特に音声言語に関しては，しゃべり過ぎは良くない，しゃべっていて実行が伴わないのは非常に恥ずかしいという文化であった。

○　急にコミュニケーションと言われても，小，中，高の先生自身がそういう教育を受けていない。だから，生徒にコミュニケーションのやり方を教えると言っても，先生方も困るのではないか。そこをどう考えていくのかがポイントになると思う。

○　コミュニケーションはこうあるべきだと教わって身に付くものではないと思う。日頃のしつけというか，学校で教わったからできるというものではない。もちろん学校教育も大切であるが，それ以外の要素も結構あるので，施策として何ができるかというと，私はある程度懐疑的にならざるを得ない。

○　コミュニケーション能力をどうやって付けるかは難しい。企業が要求しているのは分かるが，一般の社会ではどうか。言葉なんかしゃべらなくても相手に通じればいいという若者が多いので，指針や規範を作ると言ったら反発を食らうと思う。

○　困ったことが起きたときに，ばらばらで考えているだけで，みんなで話し合おうということがない。こういう現状の中で，コミュニケーション能力のことをいかに施策としてやるかと言っても難しい話だろう。

○　最近の若い人は，常識がないんじゃなくて，常識がずれているか，ゆがんでいるのではないか。コミュニケーションは文化の問題であるところから，指針は本当に最低限の目安，最低限こういうふうに対応していけばコミュニケーションが図れるという常識を示すものになるのではないか。現状を考えると，それが必要である。

○　若者の現状を考えると，確かに指針は必要かもしれない。コミュニケーション力を植え付けるためには，言葉遣いの上で，この辺りが常識であるというぐらいのものは示した方がいいのかもしれない。

○　指針のイメージとしては，原則としてＴＰＯに合わせて言葉遣いを考えましょうというようなものになるのではないか。非常にひどい誤りがよく見られるような例を幾つか挙げるという形でしか，それは作れないように思う。

○　内の言葉，親しい者同士で使う言葉を外向きに使うと，非常に抵抗が生じることがある，そういうふうに教えれば，その「運ちゃん」というのは，どっちの言葉であるかということについて，ある感覚も出てくる。つまり，基本的な考え方みたいなものができれば，個別の単語について，一々その使い方を教える必要はない。

○　今挙がっている例は，コミュニケーションではあるけれども，結局は敬語の枠に入るものだと思う。「敬語の指針」が既に出ているので，仮に何か出すとしたら，こういった指針の具体例の一部として，ということはあるのかなと思う。

○　友人に関して，私，関西ですから，この「あほう」という言い方をするけれど，それが決して非難を伴っての呼称，ばかにした呼称でないということは社会常識だと思っている。それが，もしためにする議論ではなくて，本当にそのような非難が出ているのだとしたら，確かに待遇表現を改めて考え直す必要があると感じる。

○　公からの発信がきちんとそれを聞く人たちに，日本人も外国人も含め，お年寄りも小学校高学年ぐらいまでの人間も含めて伝わるための，今うまく行っていない点を洗い出して，それに対する改良の提言をするということしかできないのではないか。それ以上の，あのばかと言えるかどうかとかとなると，広がり過ぎて難しい。

○　これまでの国語施策には，「常用漢字表」や「現代仮名遣い」のような基準とかよりどころとすべきタイプ，「敬語の指針」のようなお手本とか参考といった性格の強いタイプ，「国語力答申」のような考え方とか方向性を示しているタイプ，の三つがあると思う。それで，これからの社会を見ていくと日本の社会においても，コミュニケーション能力は非常に大切だと考えざるを得ないので，今の社会がどういうコミュニケーション能力を必要としているのかを分析した上で，日本型の社会におけるコミュニケーションの重要性やその在り方について，一つの方向性みたいなものを提示することができれば，さっきのタイプで言うと，国語力答申型になると思うが，一つの重要な貢献ができるのではないか。

○　具体的な問題になると，どうしても規制と言うのか，枠にはめることになって，何か不自由に感じる原因になったりするので，考え方として，適切なものを示して社会が共有できるようになると，非常に幅のあるやり方ができるのではないか。

○　国語力答申にも，コミュニケーション能力イコール国語力というふうに書かれているが，「第２これからの時代に求められる国語力」の中で，コミュニケーションを具体的に取り上げているかというと，そうではないと思うので，これから求められるコミュニケーションとはどんなものなのかという方向性で検討できるといい。

５　国際化した社会における情報伝達（特に災害時）に関する意見

○　情報弱者である外国人のことを視野に入れて，日本語のネイティブの人たちが，どういう日本語を使ったらいいか（特に緊急時の情報発信）について検討できるといい。

○　多文化社会の中で日本語で外国人に情報が分かる，あるいは日本語で伝わらない場合にどうするのかというところまで含めて，日本語の問題にしても，分かりやすい表現，分かりやすい専門用語，こうした点を，もっと深く議論していく必要がある。

○　２２０万の外国人たちが住んでいて，日本語で，情報を得て暮らしていることを我々はもっと認識する必要がある。

○　情報弱者の問題はこれまでにもあったことであり，外国人だけでなく，高齢者や子供にも対象を広げて考えるべき課題である。言葉は，コミュニケーションの道具だけでなく，日本人の自覚という問題とも関係する。その観点から検討したい。

○　今回，分かりやすさということが一つのポイントに挙げられているが，日本語を母語とする日本人が分かりやすく，理解しやすい言葉というのは，外国人も分かりやすいし，また学びやすいのではないか。緊急時は，別としても，基本的には同じものができてこないと，日本語が分裂してしまう気もする。

○　今回の震災では，多くの日本人が情報弱者になってしまうような国語（「直ちに人体に影響の出る数値ではない」など）が使われていることに危惧を感じる。

○　緊急時の情報発信だけでなく，役場のお知らせ，学校の通知文なども，外国人にどうやって分かりやすくするか。また書き言葉以外の，話し言葉で，例えば外国人の方の相談を受け付けるときに，どういう話し方をしたらいいかというようなことをもう少し研究しなければいけない。そういうところにもっと力を入れてほしい。

○　もう少し力を入れて調査すれば，例えば民生委員の方に，外国人と話すときは，こういうふうな聞き出し方をしたらいいとか，話し方をしたらいいとかというような指針のようなものができるのではないか。

○　特に文書なんかについては，外国人居住者の多い地域の行政は，ある程度の対応をしているように感じている。外国人居住者の多い地域の実態がどうなっているかを調査したり，分析したりして，そこから出発するのが大事かもしれない。

○　ＮＨＫでは，来年度からの３年間の取組の一つとして，日本に住んでいる外国人の方に向けて，ニュース原稿を平易な日本語に変換する技術の研究開発に本格的に取り組む。そういう方向に放送の世界も向かっていることを報告しておきたい。

○　この前，避難指示と避難勧告で混乱した。避難指示の方が，本当にすぐに逃げなければいけないのに，避難勧告と混乱してしまった。専門用語として，ある意味で勝手に決めてあるものは，日本人にとっても本当に分からないものだと思う。

○　基本は，分かりやすい日本語表現を骨格にするということでいいと思う。後は，その基本の考え方の中で，具体的に緊急時に外国人にどういう情報を出していくかという話である。非常に分かりにくい表現が，あちこちに専門用語としてある。

○　どうも自分たちの使っている言葉を生のまま，一般の方々にも使うという傾向がよく見られるように感じる。例えば放射能の「暫定基準」や，警察署で「ひったくり事案」などと「事件」でなく「事案」を使うとか。そういう言葉を平気で使う。

○　大事な言葉については，それがきちんと相手に伝わるかどうかということを考えながら使うという習慣が，実はまだちゃんとできていないのではないか。

○　我々は，割にそういう漢語とかを何となく目にしたり耳にしたりしているので，分かったような気になっていたりする。しかし，いざというときには取り違えたりする。そういう漢語などを外国人の立場から見直してみるのも有効ではないか。

○　特に若い人たちが，音で聞いて漢字に置き換える，変換するというのを自動的にやっていない層が非常に増えてきているように思う。漢字に置き換えたら，「勧」は勧めているんだから，「指示」は，もう本当にトップダウンで命令をしているんだからというふうに，ぱっと意味が浮かんでくるはずだと思う。

○　私はそういうように「勧告」などの漢語を分かりやすくしていったら，日本語の文章が大きく変わってしまうという気がする。ここは，かなり重要な問題である。

○　緊急時には，全員に正しく理解されなければいけないという用語が多分あって，そういう用語を選んで検証してみる。具体的な例で言うと，例えば，「避難命令」と「避難勧告」だったら分かるとか，そういうふうな工夫は幾らでもできる。

○　今回のような大きな出来事の後では，特に生命に関わるような問題で，誰にでも取り違えのなく，分かるようにしておかなければいけない言葉はどういう言葉で，それは例えばどういうふうにしたらいいか，言わば一種のリスク管理の問題として研究して，新聞，テレビ，官公庁が共有しておいた方がいいかもしれない。

○　この問題を扱うのは難しいと思う。発令者の責任問題を誰でも考えるので，いかようにも取れるような言葉を使うという面もある。自分には責任が掛からず，言い逃れができるように，それが発令する側の感情だと思う。

○　今回の災害でも，防災行政無線の伝え方によって非常に多くの人が助かった地域と，そうでない地域とがあると報じられている。やはり伝え方，あるいはどういう言葉を使って伝えたのかというところを検証してみるのは意味があると思う。

○　通常使っている言葉は別にして，そういう緊急時に必要な情報を伝達するための用語について検証するのは，非常に大事な問題だと思う。

○　減災と言うか，いかに災害を減らすか，被害を減らすかというところと，言葉の問題は密接につながっているのではないかという感じを私も持っている。

○　関東大震災の時の流言飛語などの問題もあるし，この言葉の問題を，我々が検討するといっても大変難しいと思うが，すごく大事な問題であると思う。

○　確かに難しいと思うが，やるとすれば，こういうところでリーダーシップを取らないとできないと思う。

○　外国人ならではの問題もやはりあって，日本人が全然気付いていないけれども，こういうふうな言い方をすると，こういうふうに誤解されるみたいなことというのはたくさんある。集住地区で，これまでどういうコミュニケーションとか，ディスコミュニケーションが起こったかというような調査は非常に重要だと思う。

○　やはり，事例を集めた方がいいと思う。例えば，災害放送でうまく行った事例，うまく行かなかった事例，そういう具体例を集めることによって，何かこうすれば良かったのではないか，今後こうすればいいのではないかが見えてくると思う。

○　駅に緊急時に押すボタンがある。そのボタンの表示が，外国人や子供にも読めるよう全部平仮名になっているが，その用語が「緊急に御用の方，または不審なものを見付けたときは」である。これを仮名で書いたら大人でもかえって読みにくい。こういうことをなくしていくための，指針になればいいのではないか。

○　同感である。漢字の言葉を平仮名で書いたら事足れりという認識が，ぱっこしているのではないか。

○　緊急時，災害時の言語の使い方については，それを研究テーマにして多くの事例を集め，どういった言葉の使い方が分かりやすいのかを検証していく必要がある。

6　コミュニケーション能力等の育成（学校教育）に関する意見

○　日本語のコミュニケーションスタイルの中で，伝わる日本語をどう教育し，どう磨いていくのか。それから，作文能力と話し言葉の能力，説明，説得の能力をどう育てていくのかについても，具体的な指針になるような形で検討していきたい。

○　公の場で自分の考えを子供たちが表現できる力をどうやって持たせていくのかということが，今の社会，今後の社会にとって大きな問題である。また，作文における表現力の乏しさをどう解決するかも大きな課題である。

○　世論調査の結果でも，「人に対する話し方が上手ではない」という人が，若い男性で多いという傾向が出ている。ここを踏まえて学校教育の中での話し言葉の実践をもっときちっとフォローしていくところから取り組んでいかなくてはならない。

○　教育の現場，特に初等教育の段階から一つ一つ，受け手と送り手の共通の理解を作り上げていく必要がある。その共通の理解の構築というところが重要である。

○　説明，説得の能力をどう育てていくか，公の場で論理的に思考しつつ他人に不快感を与えないで，どのように表現していくかといったことを盛り込んだ方向性を持てるのであれば，国語力答申の更に先に行くことができるかもしれない。

○　相互に相手を尊重し合った対話ができる力を高めていくということを教育の中でも，あるいはコミュニケーション，対話のスキルとしても，その重要性を訴えていくことが大変重要な課題であると思っている。この観点から取り上げてほしい。

○　言語の環境の変化の中で，我々の言語能力のどこが発達し，どこが衰えたのか，そこを見極めた上で，具体的な問題を考えていく必要がある。

○　日本人の説明・説得の能力をどう育てるか，どう強化していくかに関しては，是非，日本語教育の知見（例えば，OPI（＝オーラル・プロフィエンシー・インタビュー）の活用など）を生かしてほしいと思っている。

○　東京都では「「言葉の力」再生プロジェクト」が昨年度から動いている。情報を正確に理解した上で，相手の表現の意図や背景を推論し，根拠を挙げて自分の意見を述べ，話し合って，与えられた課題を解決できる力の育成を，教育庁が動いて，小中高，学校教育の中で取り組んでいる。

○　職員の採用における言語力検定の活用など，もう教育を超えたところでも，こういうふうな，言葉を論理的にというか，活用する能力というものが，やはり社会の目から見て必要ということで，このように言っているわけで，やはりこの委員会の中でも取り上げる必要があるのではないかと思う。

○　ディスカッションの場においても，言葉遣いのおかしさはどんどん指摘して一々修正する。それから文書も全部添削して返すというようなことを大学１年生に半期やってきたら，学習効果が上がり，リアクションペーパーの書き方等が非常に良くなった。やっぱりやってみればきちんと教育はできるんだなと感じている。

○　先ほど東京都の話が出たが，どうしても指導するとか教育するとかを考えるときには論理的なコミュニケーション能力の方に興味が向かってしまうけれども，もう一つの，社会的な人間関係を取り結ぶためのコミュニケーションは，論理的に課題を解決するときのコミュニケーションとは違うものがある。そこをもう少し教育の現場で取り上げられるような方策が考えられたらいいと思う。

○　小学校の国語の時間はもうおしゃべりが楽しくてしようがないとか，何か間違いを否定してしまうのではなくて，面白さを引き出して，褒めるみたいな，そういうところから対面コミュニケーションを嫌がらない子供も増えていくのではないか。答申などを作るときの，そこに流れる精神としては，話したり聞いたり，書いたり読んだりって楽しいと思えるニュアンスというか，そういうものが，やはり根底に流れていることが必要ではないかと思う。

○　新聞協会の中の用語懇談会に放送分科会があって，新人アナウンサー用に『放送で気になる言葉』という冊子を作っている。新しく入ってくるアナウンサーたちの言葉遣いのひどさを聞いて，正に学校教育の問題であると感じている人は多い。

○　コミュニケーション能力といったときに，社会的な，人とつながっていくようなコミュニケーションと，人にきちんと伝えて説得して，論理的に言葉を使っていくようなコミュニケーション能力の両面を扱う。また，対面コミュニケーションが，電子化時代に希薄になっていると言われるが，それが本当かも研究テーマになる。

○　情報化に関して言うと，携帯やパソコンなどで非対面コミュニケーションが非常に増えて，対面コミュニケーションが非常に苦手な子供たちが増えている。それについて，どういうふうな考え方を示せるかということもある。

○　ＮＨＫ放送研修センターでは，全国の小学校から高校までの先生を対象に，春，夏，冬と，文科省の後援も頂いて先生のための言葉セミナーをやっている。その中で，先生方が伝える力を本当に持っているのかなと思うこともあるので，何らかの施策で，先生方の力を付けるところから始められないのかなと考えている。

○　平成10年の学習指導要領から音声言語の重視はかなり言われてきている。ただ，日本の教育を見ていくと，基本的に，学力というのが大きく受験学力にシフトしていて，どちらかと言うと，覚えることが中心になっている。とにかく講義を黙って聞くというのが明治以降，日本の中では非常にいいものであるとされてきた。

○　学校教育の側から言うと，今，小学校では授業が随分変わってきていて，先生が一方的に教えるのではなく，子供同士が聞き合ったり，自分の考えをつなげたりということをやろうという教員が増えてきている。今回の学習指導要領の改訂では，思考力，判断力，表現力を強く求めているので少しずつ変わってきていると思う。

○　学校の敬語というのは，言語に対する知識，理解，技能という，国語の教科内容として取り扱うことになっているが，それは，飽くまで知識のレベルとしての敬語の習得であって，実社会，実生活に向けての敬語ではない。そこを変えたい。

○　コミュニケーションをどういうふうに学校教育の中に位置付けるかというのは，教科だけでなくて教育課程全体にまで広げていかないと，学校教育の中だけで全ては解決できない。知識の習得の部分とコミュニケーションの部分，是非その辺りがこういった会議で少しでも方向が出ると，教育にもつながっていくと思う。

○　学校教育の方から考えると，簡単に言えば，知識を習得するだけの学力ではなくて，ＯＥＣＤの言うところのキー・コンピテンシーである，実社会，実生活に向けた学力が求められてくる，そういった実社会，実生活に必要な学力の中に，コミュニケーションという問題が大きく関わってくると考えている。

○　これまでのような，言い方は悪いが，チョークとトークで，先生が前でしゃべって，そして，「これを覚えておくんだよ」式の授業の形態では，コミュニケーション能力の育成はできないと思う。今，どうしても学校教育の中でコミュニケーションということを考えていかざるを得ない状況もあるということを一言付け加えさせていただきたい。

○　やはり学校教育だけでコミュニケーション能力を育成するというわけではないので，社会全体としてそれをどう育成するかという観点で言えば，この国語分科会でも，十分取り上げる必要がある。ここで取り上げることで，大げさに言えば，これからの学力の方向性を示すことにもつながると思うので，何とか課題に入れていただきたい。